



若杉浩一 氏

1959年生まれ、熊本県天草郡出身。1984年九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒。同年株式会社内田洋行入社、デザイン、製品企画、知的生産性研究所テクニカルデザインセンターで製品開発と研究開発を行い、現在、内田洋行のデザイン会社であるパワープレイスにて、ITとデザインのメンバーを集めリレーションデザインセンター設立し事業化を志す。

企業の枠やジャンルの枠にこだわらない活動を行い、やりすぎて何度もデザイナーを首になるも、性懲りもなく、企業と個人、社会の接点を模索している。スチール家具メーカーなのに何故か、日本全国スギダラケクラブを南雲勝志氏と設立。

プレカット木材をインフィル部材に 杉材振興で地域との結びつきを模索

日本全国
スギダラケ倶楽部
若杉浩一氏

近年、環境保全と林業再生の観点から国産木材の有効活用が叫ばれているが、住宅の構造材、羽柄材、製材した盤材、合板用など、多岐に渡って使用されている。しかし、家具や建具以外の内装部材、つまり本格的なインフィル部材としては未成熟な面も多々ある。その様な中、新たな視点から国産材を使ったインフィル部材の開発に取り組んでいるグループがいる。その活動内容について日本全国スギダラケ倶楽部の若杉浩一氏に話を聞いた。

デザインで地域社会に貢献

― 若杉さんは国産の杉材に着目されて活動されていますが、その内容について教えてください。

若杉 私はプロダクトデザイナーであり、スチール家具の商品をデザインしてきた訳ですが、基本的にアフターファイブの活動として、国内の杉材を活用した製品開発や杉材製品の振興を目的とする「日本全国スギダラケ倶楽部」を発足させました。倶楽部を立ち上げて11年目、活動自体は13年目になります。現在では、全国で16支部、1800名の会員がいます。林業関係、地方行政、学術関係から一般のOLや大学生までが参加しています。

― なぜ、スチール家具のデザイナーが杉に関連する活動を始めたのでしょうか。

若杉 我が国の林業の代表的な樹種が杉であるにも係わらず、海外からの輸入材に押され、いつの頃からか建築や家具に使われなくなっ